

1200年前後のドナウ河流域における文学事情：ヴァルターの「格言歌」L 20, 31; L 24, 33; L 28, 1

著者	松村 國隆
雑誌名	研究論集
巻	95
ページ	73-85
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006108

1200年前後のドナウ河流域における文学事情

—ヴァルターの「格言歌」L 20, 31 ; L 24, 33 ; L 28, 1 —

松 村 國 隆

要 旨

1200年前後のドナウ河流域において、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは歌人として群を抜く存在であり、その名はドイツ全土に広まっていた。しかしながら、恋愛歌人としてだけでなく格言歌人としても彼は他の追随を許さなかったし、歌い振りの点でも尋常ではなかった。つまり彼は従来の歌謡の規範を打ち破り、「格言歌」に新風を吹き込んだと言われている。本論文の目的は、ヴァルターがかつての活動の場であったウィーン宮廷をテーマにうたったL 20, 31 およびL 24, 33、さらに宮廷歌人として迎えられという夢が結局は叶わなかった心境をうたったL 28, 1 を取り挙げて、とくに1198年以降に彼が「格言歌」というジャンルをどのように展開していったのか、その経緯を彼の歌謡の再検討を通じて明らかにすることにある。

キーワード：ドナウ河、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、ウィーン宮廷、格言歌

1. はじめに

ドイツ中世最大の歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの歌謡の特徴として、本来ならば別のジャンルとして扱われるべき「恋愛歌」(Minnesang) と「格言歌」(Spruch, Spruchdichtung) が、彼の場合、そうしたジャンル分けがそれほど自明でないことはつとに知られている。もっとも「恋愛歌」と「格言歌」が異なるジャンルとして定着したのは、ようやく19世紀に入ってからのことであった。カール・ジムロックがこれら両ジャンルを規定する際、彼の関心はあくまでも「恋愛歌」にあったために、およそ「恋愛歌」に属さない歌はすべて「格言歌」に入れてしまっている¹。しかし中世においてすでに両ジャンルには役割の分担があり、すくなくとも恋愛歌人が同時に格言歌人であったというためしはない。

1180年代から1190年代にかけて、「恋愛歌」から出発した若い歌人ヴァルターにとって、さしあたり「格言歌」は自らの技倆を磨く対象ではなかった。彼はあくまでもウィーン宮廷で歌人として「恋愛歌」を披露していた。しかし1198年から始まったと言われる遍歴・放浪生活が、彼の歌謡世界を一変させることとなった。遍歴・放浪生活で獲得された新しいジャンルである「格言歌」は、彼の歌謡世界を結果として豊饒ならしめたのであった。これら両ジャンルにか

かわった歌人ヴァルターとウィーン宮廷との関係を、その頃の彼の作とされるいくつかの「格言歌」の再検討を通して提示し、かつ彼の「格言歌」の革新性の実態を探ってみたい。

2. ヴァルターとウィーン宮廷

ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの「格言歌」において、ウィーン宮廷が重要な役割を演じていることに異論を唱える者はいない。彼にとってウィーンは文字通り運命的な町であり、両者は運命をともにしていたと言ってもよい²。したがって彼はウィーンを離れてからも、折にふれてウィーン宮廷とその主人であるオーストリア公のことをうたっている。その数は13歌にのぼり、数それ自体がやはり特別な関係であったことを窺わせる³。彼がウィーン宮廷あるいはオーストリア公をうたう際に、いわゆる歌の「調」(Ton) から見ると、「ウィーン宮廷調」(Wiener Hofton) だけが彼によって採用されたわけではなかった。確かに L 20, 31 や L 24, 33 や L 25, 26 は「ウィーン宮廷調」に属するが、L 19, 29 は「フィリップ調」(Philippston) であるし、L 28, 11 は「王フリードリヒ調」(König-Friedrichston) である。また L 32, 7 や L 34, 34 や L 36, 1 は「不満調」(Unmutston) に、L 84, 1 は「レオポルト調」(Leopoldston) に、L 84, 14 は「エンゲルブレヒト調」(Engelbrechtston) に属している。このように採用された「調」はじつに多岐に亘っていることをまず押さえておきたい。この事實は、1198年以降かなり長い期間にわたって、ヴァルターがウィーン宮廷をテーマにうたい続けたということを含みじくも物語っている。

冒頭ですでに述べたように、一般に「恋愛歌」と「格言歌」はまったく異なる歌謡の二つのジャンルとして規定されている。これら二つのジャンルは単にテーマやフォルムだけでなく、歌人が所属する社会によっても截然と区別されていた。「恋愛歌」は宮廷文学であり、宮廷に暮らす人々によって支えられる文学であった。それに対して、「格言歌」は遍歴する者たちの文芸であり、遍歴歌人によってうたわれる歌謡であった。ところが、ヴァルターはこうした約束事によって設けられた垣根を越えて、両ジャンルの間を行き来していた³。彼がいかにして、またいつこのような大胆な試みに挑戦し、新しい境地を切り拓いたのかについて、正確なところは分っていない。にもかかわらず、1198年の出来事が彼にとって決定的であったことは大方の意見の一致するところである。その出来事とは、この年の春に彼の主人(パトロン)であったオーストリア公フリードリヒ一世(在位1194-98)が亡くなり、その弟のレオポルト六世(在位1198-1230)が後を継いだことを指している。カール・ベルタウは1198年の歴史的事実をヴァルターの生涯と絡ませて、おおよそ次のように述べている。

第三回十字軍の統率者であった皇帝ハインリヒ六世(在位1190-97)の死の報告を受けるや、諸侯たちはみな旅囊を詰めて、各港へ逐電した。しかもその最初の人がヒルデスハイム司教で、

1198年2月1日のことであった。そこで彼らは再度、年若い王位継承者フリードリヒ（後の神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世）に忠誠を誓い、シリアのアッコで1198年3月5日に客人款待の兄弟団がドイツ騎士団として結成されたが、この軍団は彼らの指導者たちが出発したことを聞き知ったとき、すでにトロンの陣営を取り壊し、死者たちや負傷者たちをモスレムの手に委ねたまま逃亡していた。その後、十字軍遠征隊はいくつかの経路をとって帰郷した。一つはアプーリアとローマ経由（パッサウ司教ヴォルフガー）であり、いま一つはイストリアからゲルツ経由（ハルバーシュタットのガルドルフ）あるいはヴェネチア経由（プファルツ侯ハイน์リヒ）であった。1198年4月16日、オーストリア公フリードリヒ一世は帰郷の途上、アッコで亡くなった⁴。ヴァルターはこのオーストリア公のもとで厚遇され、「ファミリア」（familia）に属していたのかもしれない。パトロンを失ったヴァルターは、のちに亡き公を偲んで、L 19, 29で「オーストリア公フリードリヒ様の魂が救われ、肉体が失われたとき、鶴のように胸を張るわたしの歩みを地下へ連れて行かれました」（Dô Friderich ûz Ćesterrich alsô gewarp, / daz er an der sêle genas und im der lîp erstarp, / dô fuort er mînen krenechen trit in derde.⁵）とうたうほどに公を慕っていた。いまやオーストリアでは、これまでシュタイアーマルクのみの支配者であったレオポルト六世が実権を掌握した。それ以来、ヴァルターはオーストリア公を前にして、あるいは遠くに望んで、自らの不遇をかこち顔でうたうことになった。「ウィーン宮廷調」でうたわれた歌として有名な L 20, 31「わたしには幸せの門が閉ざされています」（Mir ist verspart der sælden tor）もその一つである。

3. 格言歌 L 20, 31

Mir ist verspart der sælden tor,
 dâ stên ich als ein weise vor.
 mich hilfet niht, swaz ich dar an geklopfe.
 wie möht ein wunder grœzer sîn,
 ez regent beidenthalben mîn,
 daz mir des alles niht enwirt ein tropfe!
 Des fürsten milte ûz Ćesterriche
 fröit dem süezen regen geliche
 beide liute und daz lant.
 erst ein schœne wol gezieret heide,
 dar abe man bluomen brichet wunder.
 und bræche mir ein blat dar under

sîn vil milte richiu hant,
so möhte ich loben die süezen ougenweide.
hie bî si er an mich gemant.⁶
わたしには幸せの門が閉ざされています。
その前にわたしは孤児のごとく立っています。
力のかぎりその門を叩いても、何の甲斐もありません。
これ以上に大きな不思議がほかにあるでしょうか。
わたしの左右に雨が降るのに、
その一滴もわたしには当たりません。
オーストリア公の施しは
心地よく降る慈雨のごとく、
民も国も歎ばせませす。
殿は色とりどりに花咲く美しい野原です。
人々はそこからたくさんの花を摘みます。
施し多い殿の御手が
わたしにその一輪でも摘んでくだされば、
わたしはその輝く目の楽しみを誉め讃えるでしょうに。
この歌によって殿がわたしを覚えてくださるよう。

この「格言歌」はすでに他の個所で何度か取り上げているが⁷、ヴァルターとウィーン宮廷との関係、とりわけオーストリア公との関係を知る上で、もっとも重要な歌謡の一つと言えるだろう。D写本で L 24, 18 および L 24, 33 とともに一つのグループをなしている⁸ この歌は、ウィーン宮廷を立ち去らなければならない事情、ウィーン宮廷に自らの居場所がもはや存在しない状況をうたっている⁹。新しいオーストリア公レオポルト六世は確かにヴァルターをウィーン宮廷に留め置かなかった。上記の歌にあるように、彼がこの歌人を門前払いしたのはいつのことであるかについて、テキストは何も語っていない。また、公はオーストリアの地を封土として拝領するためにシュヴァーベン王フィリップの宮廷に赴いたことは分かっているが、そのときこの歌人を伴って行ったかどうかについては定かでない。例えばジークフリート・バイシュラークやギュンター・シュヴァイクレはこの同伴も大いにあり得たことであると推定している。いな、シュヴァイクレは一步踏み込んで、ヴァルターがパトロンの交替を決意した、つまりオーストリア公がこの歌人を解雇したというよりは、歌人ヴァルターがオーストリア公からシュヴァーベン王に「鞍換えした」のではないかとの大肝な仮説を展開している¹⁰。レオポルト六世は6月27日から30日にかけてウォルムスに滞在し、また8月16日にはマインツに滞在してい

たことも知られているが、その際ヴァルターが同伴していたかどうかについては闇の中である。ただし、1198年が歌人ヴァルターにとって単なる経めぐる年の一つでなかったことは、彼の歌謡から判断するかぎり、大いにありうることである。

ヴァルターの後半生には、彼の作品の場合と同様に、つねに政治の糸が絡まっていた。しかしその際、彼の「格言歌」と「恋愛歌」が同時進行的にうたわれていたのだろうか。ネルマンによれば、歌人が宮廷に迎え容れられているかぎり、彼はあくまでも恋愛歌人であって、けっして格言歌人ではなかった。つまり両ジャンルが同時進行的にうたわれていたのではなく、歌人の置かれていた状況によってうたわれるジャンルも異なってくるというのである¹¹。では、恋愛歌 L 51, 13「五月には何と多くのものが与えられているかご覧なさい」(Muget irschouwen waz dem meien / wonders ist beschert?) はどうであろうか。伝承によれば、この歌では前半と後半がもともと異なるテキストであって、写本Cで一つの歌謡としてまとめられた。しかし他の写本、たとえば写本Aでは前半の3節と後半の第6節の計4節で構成されている¹²。まず第3節をここに掲げよう。

Wol dir, meie, wie dû scheidest
 allez âne haz!
 wie dû walt und ouwe kleidest
 und die heide baz!
 Diu hât varwe mê.
 >dû bist kurzer!< — >ich bin langer!<
 also stritent si ûf dem anger,
 bluomen unde klê.¹³

五月よ、きみは素晴らしい。何とみごとに執り成してくれることでしょう、
 すべてのものが仲違いしないように。

きみは森や沃野を、それにもまして野原を
 何とみごとにかざってくれることでしょう。

野原はいつそう彩り豊かです。

「おまえのほうが短い！」—「ほくのほうが長い！」

そんなふうには草で競い合っているのは、

花とクローバ。

先の歌 L 20, 31 において慈雨として現れたものが、ここでは五月が民衆に施す恵みとしてうたわれている。日本のような春夏秋冬の交替ではなく夏冬の交替が主流であるヨーロッパでは、

五月こそは夏の典型として、すなわちもっとも快適で素晴らしく、歓待されるべき季節として称揚されてきた¹⁴。したがって、「恋愛歌」において *sumer* なる語が登場すれば、夏であると同時に、もっとも好ましい季節であると理解しなければならない。ここではしかし、この自然界の理想の姿に、そのネガティブな現実が対置されている。意識して用いられる自然のメタファー表現は「自然序詞」(Natureingang)としての機能を十二分に発揮して、五月を迎えた自然の牧歌的な装いとどまらず、人間の、つまりは女主人の傾聴と愛顧を切に願う歌人自身の思いをも表現している。すなわち宮廷生活における満たされない愛、叶わぬ恋として、この歌の後半でその不如意が切々とうたわれる。これは「自然序詞」の用法のなかで「夏」(*sumer*)と「哀しみ」(*leit*)のパターンとして登場するものである。かくして最終節は以下のように結ばれている。

Scheident, frowe, mich von sorgen,
liebet mir die zît!
oder ich muoz an fröiden borgen.
daz ir sælic sit!
Muget ir umbe sehen?
sich fröit al diu welt gemeine.
Möchte mir von iu ein kleine
Fröidelin geschehen?¹⁵

婦人よ、わたしから思い煩いを取り除いてください。
この五月をわたしのために心地よくしてください。
そうでなければ、わたしに歓びはありません。
どうかあなたが幸せでありますように。
まわりをご覧になってくださいますか。
ものみながこぞって歓んでいます。
わたしにもあなたから
歓びをすこし施していただけるでしょうか。

5行目の「まわりをご覧になってくださいますか」(Muget ir umbe sehen?)が、この歌の第1連冒頭でうたわれている「五月には何と多くのものが与えられているかご覧になってくださいますか」(Muget ir schouwen waz dem meien / wonders ist beschert?)¹⁶に照応している。ヴァルターがウィーン宮廷を去ることになる年の五月とこの「恋愛歌」の五月を関連づけたベルタウの論は、きわめて興味深く示唆に富んでいる。つまり L 51, 13 はオーストリア公フリードリ

ヒー世が4月にこの世を去り、ウィーン宮廷を離れざるを得なくなった際の最後の恋愛歌であり、L 20, 31 はフリードリヒー世のあとを継いだレオポルト六世への歎願の歌である、と彼は見ているのである。しかしこの仮説はヴァルターの歌謡のテキストと歴史的事実からの類推であり、いささか大胆にすぎるかもしれない¹⁷。

4. 格言歌 L 24, 33

Der hof ze Wiene sprach ze mir :

>Walther, ich solte lieben dir,

nu leide ich dir, daz müeze got erbarmen.

mîn wirde diu was wilent grôz,

dô lebte niender mîn genôz

wan kunic Artûses hof, sô wê mir armen!

Wâ nû ritter unde frowen,

die man bî mir solte schowen?

seht, wie jâmerlich ich stê!

mîn dach ist fûl, sô risent mîne wende.

mich enminnet nieman leider.

golt, silber, ros und dar zuo kleider,

die gab ich unde hât ouch mê.

nûn hab ich weder schappel noch gebende

noch frowen zeinem tanze, owê!¹⁸

ウィーンの宮廷はわたしに言いました。

「ヴァルターよ、わたしはおまえの気に入るはずだった。

ところが今ではおまえの願いを叶えられない。神よ、憐れみたまえ。

かつてわたしの名声はとどろいていた。

当時わたしに比肩するものはなかった、

アルトゥース王の宮廷を除いて。ああ、哀れなわたし。

わたしのもとにいるはずの

騎士たちや婦人がたは、今どこへ行ってしまったのか。

見よ、何とうらぶれた姿でわたしは佇んでいることか。

わたしの屋根は朽ち、わたしの壁は崩れている。

残念ながらわたしを愛でる者はいない。

わたしは金、銀、馬、それに衣装までも
 惜しげなく与えた。それでも与えた以上に持っていた。
 ところが今では花冠も髪飾りもない。
 踊りの相手をしてくれる婦人がたもないとは、ああ嘆かわしい」と。

さしあたり、L 24, 33 をどのように位置づけるかが問題となる。ヴァルターがウィーン宮廷を遠望した「格言歌」、したがって1198年からかなり経ってからの作と捉えるなら、次のような解釈になるだろう。ここでヴァルターは、もはやオーストリア公を全面に登場させるのではなく、ウィーン宮廷そのものに語らせるという伝統的な手法である擬人法 (personificatio) を選び取っている¹⁹。恨み辛みは遍歴・放浪の果てにいつしか和らぎ、すでにウィーン宮廷は彼にとって距離を置いて眺める対象になっていた。それでも4行目から5行目にかけて、「かつてわたしの名声はとどろいていた。/ 当時わたしに比肩するものはなかった」とウィーン宮廷に語らせるヴァルターの心境は複雑である。いつしか語り手としてのウィーン宮廷は聴き手であるはずのヴァルターその人にすり替わっているかのようですらある。レオポルト六世によって宮廷に迎え容れられる見込みが断たれたヴァルターは、現実のウィーン宮廷からかけ離れたその凋落した姿をイメージ化し、かつ対象化して突き放し、過去の栄華との際立った対比において紹介しているからだ。その原因はひとえに、自らの技倆に恃むところのある優れた歌人ヴァルターに理不尽な仕打ちでもって臨んだオーストリア公レオポルト六世にある。しかしながら歌人はそのことについて一切語らず、ひたすらウィーン宮廷を擬人化して、その嘆きあるいは訴えを執拗に語らせている。この歌の秀逸な点はまさにそこにある。それにもかかわらず、いな、それだからこそ、ヴァルターのウィーン宮廷への憧憬がいかに切なるものであったかが聴く者の心に伝わってくる。

しかし、シュヴァイクレはこれとは異なる見解を提示している。彼はまずD写本に注目している。彼は、この歌 (D 249) が先の L 20, 31 (D 250) および L 24, 18 (D 248) とともに一つのグループを作って伝承されていることに依拠して、これら二つの歌の成立時期にそれほど大きな隔たりはなく、しかも先の L 20, 31 はこの歌を補完する形でうたわれたのではないかと想定している。つまり、ヴァルターは L 24, 33 でもって、間接的ではあるが、現実のウィーン宮廷の名声を損ないかねない、凋落したウィーン宮廷、宮廷生活になくってはならない「騎士たちや婦人がた」、「金、銀、馬、それに衣装」、さらには「歌人たち」も欠落したウィーン宮廷を描出したのだから、オーストリア公レオポルト六世の怒りを買わなかったと言えば嘘になる。これはそれほどに辛辣な宮廷批判の歌である。したがって彼はこの怒りを鎮めるために、新たな歌を披露しなければならなかった。その歌こそが、前者に比べて激越な批判を後退させ、むしろオーストリア公への嘆願を強く前面に押し出した L 20, 31 であったというのである²⁰。し

たがって、この解釈を採用すれば、前章で展開した L 20, 31 の解釈とは成立時期の点で齟齬をきたすことになるが、これらの歌の前後関係や成立事情を説明する確たる準拠がない現状では、この仮説と解釈も否定し去ることはできない。

ともあれ L 20, 31 と L 24, 33 の提示の仕方は異なるものの、ヴァルターの歌謡によく見られるように、うたう主体である「わたし」の嘆きや訴えが「わたし」ののっぴきならない状況をはからずも浮かび上がらせている。いずれの歌にも、自己主張を執拗に繰り返し、多少の障碍では一歩も後に引き下がらないヴァルターという人間がよく現れており、さらには彼がウィーン宮廷との間で抱えていた問題の深刻さをも印象づけている²¹。

5. 格言歌 L 28, 1

Von Rôme voget, von Pülle künec, lât iuch erbarmen,
 daz man bî rîcher kunst mich lât alsus armen.
 gerne wolde ich, möhte ez sîn, bî eigenem fiur erwarmen.
 Ahî, wie ich danne sunge von den vogellînen,
 von der heide und von den bluomen, als ich wilent sanc!
 swelch schœne wîp mir gæbe danne ir habedanc,
 der lieze ich liljen unde rôsen ûz ir wengel schinen.
 Kume ich spâte und rîte fruo, gast, wê dir, wêl
 sô mac der wirt wol singen von dem grüenen klê.
 die nôt bedenkent, milter künec, daz iuwer nôt zergê!²²

ローマの保護者、アプーリアの王よ、わたしを憐れみ給え。
 わたしはこんなに豊かな芸を持っているのに、

かくも貧しい境遇に置かれているのですから。

許されることなら、わたしは自らの炉のそばで体を暖めたいものです。
 それが可能でしたら、ああ、以前うたっていたように、
 小鳥や荒野や草花の歌をどんなにかうたうでしょうに。
 美しい婦人がわたしに感謝の言葉をかけてくれようものなら、
 百合や薔薇の花々をかわいい頬からみごとに輝き咲かせるでしょうに。
 わたしは遅く宿にたどり着き、早朝には旅立ってしまいます。

「客人よ、おまえは何と哀れなことよ」

しかし一家の主人でしたら、緑のクローバをはるかに上手にうたうことができます。
 この苦しみにご配慮賜らんことを、施し多い王よ、あなたの苦しみも消されんことを。

この「格言歌」はウィーン宮廷と直接の関係はない。にもかかわらず、歌人ヴァルターのウィーン憧憬あるいはウィーン回帰願望が底流として潜んでいることを窺わせる歌ではある。冒頭行で呼びかけられている「ローマの保護者」にして「アプーリアの王」とは、ドイツ王フリードリヒ二世（在位1212-50）、のちに神聖ローマ皇帝（在位1220-50）にもなった人物のことである²¹。因みに、アプーリアとは南イタリアの一地方で、バーリやプリンディジやターラントといった古い港町が海沿いに点在し、12世紀になって支配権はノルマン人からシュタウフェン家に移っていた。彼がドイツの王であると同時にアプーリアの王と称されていた所以である。したがってこの歌は、ヴァルター最晩年の1220年代に成立したと理解してよい。先の「五月の歌」とは異なり、「格言歌」であるにもかかわらず、ここでは「恋愛歌」にお馴染みの「自然序詞」に付きものの小道具が自在に用いられている。「小鳥や荒野や草花の歌」とは「恋愛歌」のことであり、ヴァルターは「百合や薔薇の花々」を恋する婦人の頬から咲かせようとうたう。さらにL 51, 36の「花とクローバ」を想起させる「緑のクローバ」もまたその関連のもとに挙げられている。いずれにしても、これらの小道具が登場するのは「恋愛歌」をうたうことができない自らの現実の裏返しであり、歌の才能を正当に評価してくれない主人とその宮廷が、かつてのウィーン宮廷に対する恨み辛みと同様に、ここでも繰り返し話題にされている。この当時でもなお、彼にはまだ受け容れてもらえる宮廷がなかったということである。寛大な心の持ち主で施し好きの主君、中世ドイツ語の「ミルテ」(milte)を体現した主君と見做されていた時のドイツ王フリードリヒ二世に向けられた歌人の具体的で物質的な訴えは、それだけいっそう切実であった。歌の才は充溢しているのに、それを顧みてくれるパトロンがいない。貧しくも惨めな状態に置かれた者がすぎるのは、王や領主の愛顧であり、具体的な施しであった²³。ことに寒さは遍歴・放浪の身にこたえるものであったことが知られる。「自らの炉のそばで体を暖めたい」とうたう歌人は、先に挙げた同じ皇帝にして王への感謝の歌L 28, 32のなかで、かつて悩まされた「霜焼けのことをわたしは今では心配しなくてよくなりました」(nū enfürhte ich niht den hornunc an die zêhen²⁴)と語りかけている。hornuncはもともと「二月」ないしは「冬の寒さがもっとも厳しい季節」を意味する語であり、たとえば中世後期の作品『ヘルムブレヒト』では、und wær ez hornunges weter²⁵「たとえ厳寒の季節の天候であろうとも」といった用例がみられる。しかしここでは、an die zêhenとの関連から「霜焼け、凍傷」と訳するのが妥当であろう。遍歴・放浪の身の歌人にはよほど霜焼けが身にこたえたのだろう。霜焼けをこれだけ赤裸々にうたった歌人を論者は寡聞にして知らない。このように「恋愛歌」に比して、「格言歌」の内実には日々の生活のにおいが色濃く漂っており、当時の「格言歌」からは歌人たちの素顔や置かれていた状況を垣間見ることができる。しかるに、たとえば「恋愛歌」の一つであるL 118, 24では次のようにうたわれる。

Ich ensah die schoenen nie
sô dicke, daz ich daz <gen ir> verbære,
mirn spilten diu ougen ie.
der kalte winter was mir gar *unmære*.
Ander liute dûhte er swære,
mir was die wîle, als ich enmitten in dem meien wære.²⁶
この美しい女性を見るたびに、
わたしの眼がいつも輝くのを
隠しておくことはできません。
寒い冬もわたしには何ともありません。
他の人たちには冬は辛いようですが、
わたしは五月の最中にいるような気分です。

「恋愛歌」ではやはり愛の力が冬の寒さをも凌いでいる。一人の恋する女性を前にすると、霜焼けも我慢しなければならない。そこには理想の世界が展開されており、「格言歌」に登場する厳しい現実と向き合う歌人とは別の姿が提示される。

6. おわりに

以上、論者はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの「格言歌」のなかで、彼がウィーン宮廷を離れ、遍歴と放浪に身を置いた時代にうたわれた3つのテキストを再検討してきた。その革新性をいくつか挙げるとすれば、第一に形式面ではウィーン宮廷をテーマにうたいながら「調」(Ton) がかならずしも一定の枠に収まらず、総じてその歌いぶりは自由であること、第二に1198年のウィーン別離が彼のウィーン憧憬、ウィーン回帰願望を惹起し、それがいくつかの「格言歌」の底流となり、うたう主体 (singendes Ich) として「格言歌」に顔を覗かせていること、そして第三にウィーン宮廷をテーマにした「格言歌」には従来の「格言歌」にしばしば見られた教訓的な内容のものが少なく、「恋愛歌」における「女主人と歌人」という構図が、そのまま「主人と歌人」のそれに置き換えられている場合が多いことであろう。第一の特徴と第二の特徴は相互に関連し合うものであり、おそらく論争を挑みつつ強烈に自己を主張するヴァルターにとって、歌い振りの自由さこそは不可欠の条件であったと考えられる。また第三の特徴は、「格言歌」に「恋愛歌」と同等の地位を与えたヴァルターの功績を端的に示す特徴である。つまり、「恋愛歌」において女主人に捧げた歌を、今度は叶えられない願望を宮廷の主人、つまりパトロンであってほしい人に向けることによって、「格言歌」に大きな

可能性を提供した。ここにおいて中世歌謡は古い皮袋を捨て、新しい皮袋に現実の矛盾を反映した内容を注ぐことが可能になったと言えよう。

注

- 1 Vgl. Hilbert Weddige: Einführung in die germanistische Mediävistik. München (C.H.Beck)²1992, S. 277; Horst Brunner/Gerhard Hahn/Urlich Müller/Franz Viktor Spechtler: Walther von der Vogelweide. Epoche-Werk-Wirkung. München (C.H.Beck) 1996, S. 137. なお、ジムロックの編纂した書は以下の通り。Karl Simrock: Gedichte Walthers von der Vogelweide. Übersetzt von Karl Simrock und erläutert von Wilhelm Wackernagel. 2 Bde. Berlin 1833.
- 2 Kurt Helbert Halbach: Walther von der Vogelweide. Stuttgart (Metzler)⁴1983, S. 30.
- 3 さらにオーストリアに言及した歌もあり、たとえば L 32, 7 では、Ze Österrich lern ich singen unde sagen 「オーストリアでわたしは歌うことと語ることを学びました」とあり、歌人としての出発の最初からオーストリアの地と深くかかわっていたこと、そしてそのことを誇りにしていたことが端的に示されている。
- 4 Vgl. Karl Bertau: Deutsche Literatur im europäischen Mittelalter. 2 Bde. München (C.H.Beck) 1973, S. 809f. なお、オーストリア公フリードリヒ一世の亡骸(遺骨のみ)はパッサウ司教ヴォルフガーによって持ち帰られ、ウィーン近郊のハイリゲンクロイツ修道院に埋葬された。ここには彼の父ハインリヒ一世も眠っている。
- 5 Walther von der Vogelweide: Leich · Lieder · Sprüche. Hrsg. von Christoph Cormeau. 14., völlig neubearbeitete Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns, mit Beiträgen von Thomas Bein und Horst Brunner. Berlin/New York (Walter de Gruyter) 1996, S. 38.
- 6 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 41.
- 7 拙著『オーストリア中世歌謡の伝統と革新—ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデを中心に—』東京(水声社)、1995年、127頁以下参照。さらに、丹下・松村編『ドナウ河—流域の文学と文化—』京都(見陽書房)、2011年、38-39頁参照。
- 8 Vgl. Brunner/Hahn/Müller/Spechtler, Walther von der Vogelweide, S. 154f.
- 9 Vgl. Siegfried Beyschlag: Walthers Scheiden von Wien. In: Siegfried Beyschlag (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Darmstadt 1971 (WdF 112) S. 548-607; Günther Schweikle: Walther und Wien. Überlegungen zur Biographie. In: Hans-Dieter Mück (Hrsg.), Walther von der Vogelweide. Beiträge zu Leben und Werk. Stuttgart (Stöffler & Schütz) 1989, S. 75-105.
- 10 Vgl. Schweikle, Walther und Wien, a.a.O., S. 79f.
- 11 Vgl. Eberhard Nellmann: Spruchdichter oder Minnesänger. Zur Stellung Walthers am Hof Philipps von Schwaben. In: Hamburger Kolloquium 1988 zum Geburtstag von Karl-Heinz Borck. Stuttgart (Hirzel) 1989, S. 37f.

- 12 Vgl. Walther von der Vogelweide: Werke. Bd. 2: Liedlyrik. Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Günther Schweikle. Stuttgart(Reclam) 1998, S. 669ff.
- 13 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 106.
- 14 Vgl. Wolfgang Ganzemüller: Das Naturgefühl im Mittelalter. Leipzig 1914; Barbara Wulffen: Die Natureingang in Minnesang und frühem Volkslied. München 1963.
- 15 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 107.
- 16 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 106.
- 17 Vgl. Bertau, a.a.O., S. 819f. ベルタウが提起している大胆な仮説は、徹底してヴァルターのテキストを唯一の拠り所としているため、その仮説に整合性があればあるほど、かえってその信憑性に疑念がもたれることになる。シュヴァイクレは上掲の論文(注9参照)で「文学は、それが政治的な抒情詩であっても、歴史的な資料ではないし、特定の現実の出来事を記録するものでもない」と述べ、さまざまな仮説に慎重な姿勢で臨んでいる。それでもなお、ベルタウの着眼点の卓抜なことは大方の認めるところであり、従来の文献学的な研究に風穴をあけた点は評価できる。
- 18 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 46.
- 19 Vgl. Walther von der Vogelweide: Werke. Bd. 1: Spruchlyrik. Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Günther Schweikle. Stuttgart(Reclam) 1994, S. 459.
- 20 Vgl. Schweikle, Walther und Wien, a.a.O., S. 83.
- 21 Vgl. Manfred Günter Scholz: Walther von der Vogelweide. Sammlung Metzler Bd. 316. Stuttgart (Metzler) 1999, S. 62.
- 22 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 52.
- 23 Vgl. Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 54; Christa Ortmann: Der Spruchdichter am Hof. Zur Funktion der Walther-Rolle in Sangsprüchen mit milte-Thematik. In: Walther von der Vogelweide. Hamburger Kolloquium 1988. Zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Karl Heinz Borck. Stuttgart(Hirzel) 1989, S. 25ff. ウィーン宮廷で受け容れられることを断念したヴァルターが、その最晩年ようやく皇帝フリードリヒ二世から小さな采邑を賜ったことについて、別の歌の冒頭行 L 28, 31 で繰り返している(Ich hân min lèhen, al die werlt, ich hân min lèhen. 「わたしには采邑があります、世のすべての人々よ、采邑を得たのです。」)が、われわれがここで扱っている歌 L 28, 1 の直前に作られたであろうと考えられる。
- 24 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 54.
- 25 Wernher der Gartenære: Helmbrecht. Hrsg. von Klaus Speckenbach. Darmstadt(Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1974, S. 34.
- 26 Walther von der Vogelweide, a.a.O., S. 251.

(まつむら・くにたか 国際言語学部教授)